０３・ノーパン強要されてずっとぱんつ穿かせてもらえなかったお●んこを、跪きガチクンニで慰めてもらう

トラック０２の数時間後。
とある年の春。
五月十二日。十七時ごろ。
場所は主人公とシーラが本日宿泊する、高級ホテル。
天気は晴れ。室温は二十四度程度。
主人公とシーラは今、ホテルスタッフによる部屋の説明を受けているところだ。

このトラックは、『ホテルスタッフ』のセリフから始まる。
最初の５秒ほどは空白にする。
舞台はとても広いホテルの一室。

▲　ボイス加工あり
【１メートルほど離れた位置から聞こえる】
〈ホテルスタッフ〉

●正面　３０センチ
「【穏やかに丁寧に。
客室の案内を終えて、最後の挨拶をしている。
落ち着いた、仕事ができそうな印象の、三十代後半の女性スタッフ】
……ご案内は以上になります。
何かございましたら、お気軽にお申し付け下さい」

●正面　３０センチ
「【ホテルスタッフに話しかけている。
穏やかに、にこやかに】
はい、ありがとうございます」

〈主人公〉
「……」

シーラ、にこやかに女性スタッフにお礼を言う。
対する主人公はその陰に隠れ、ただ小さく頭を下げるばかりだ。
こんなの大人しすぎて、ちっとも主人公らしくない。

最低限の礼儀は果たしているとはいえ、知り合いがこの光景を見たら、不思議に思う事だろう。
むろん、そうなってしまう理由は一つしかない。
……服の上からでは見えない部分が、気になって仕方ないからだ。

▲　ボイス加工あり
【1メートルほど離れた位置から聞こえる】
〈ホテルスタッフ〉
●正面　30センチ
「【穏やかに丁寧に。
客室の案内を終えて、最後の挨拶をしている。
落ち着いた、仕事ができそうな印象の、三十代後半の女性スタッフ】
それでは、ごゆっくりお楽しみ下さいませ。
失礼致します」

SE1　ホテルスタッフの足音
【最初から最後まで流す】
【だんだん遠ざかる】

ＳＥ２　ホテルスタッフが部屋の扉を開ける音
【最初から最後まで流す】
【少し遠くで聞こえる】

ＳＥ３　ホテルスタッフが部屋の扉を閉める音
【最初から最後まで流す】
【少し遠くで聞こえる】
【ＳＥ３が止んで、３秒ほど経ってから次の『シーラ』のセリフ】

だが、そんな主人公の事情など、ホテルスタッフは知る由もない。
彼女は丁寧に頭を下げると静かに去っていき、部屋は主人公とシーラの二人きりとなる。
そして主人公が居心地悪そうに制服のスカートを握りしめた頃……シーラが口を開いた。

●正面　３０センチ
「【※息づかいのみ※　で表現する。
一息つく。
ホテルスタッフが去り、主人公と二人きりになったので】

ふう……。
【穏やかに優しく。
ごく通常通りのトーンで。
主人公が昼休みから下着を穿いていない事など、完全に忘れてしまったかのように。
部屋を見渡しながら、その感想を話している。
また、棒立ちの主人公に、寛ぐように促す】
噂に違（たが）わず、素晴らしいお部屋ですね。
ほら、お嬢様。
今日（きょう）は久方（ひさかた）ぶりの休日。お祝いの宿泊なのですから。
どうぞお寛（くつろ）ぎになって下さいませ」

〈主人公〉
「ぱんつ……」

●正面　３０センチ
「【優しく続きを促す。
あたかも、主人公の意図するところがわからないかのような態度で】
うん？」

〈主人公〉
「ぱんつ……っ❤　返してぇっ……❤」

主人公、ホテルスタッフの気配が完全に消えたのを確認すると、すぐに媚びた声で訴える。
わかりやすく足をもじもじさせながら、昼休みから今までいかに自分が恥ずかしく、大変な目に遭っていたかを主張し、シーラにその責任を取ってもらおうとしている。

●正面　３０センチ
「【いかにも『今気づいた』という感じで。
『なるほど、道理で違和感があった』と思っているかのようなふりをする。
もちろんその件はずっと覚えていたし、恥ずかしがり、困り果てる主人公を見て内心興奮していた。
だが、まだそれはおくびにも出さない】
あぁ。その件でございましたか……。
道理でずっと、お静かでいらしたのですね」

だが、シーラは涼しい顔だ。
主人公がこんなに困り果て、観念して甘えているのに、触れてさえ来ない。

SE4　シーラが主人公に近づく音
【最初から最後まで流す】

〈主人公〉
「……！」

だが、ここでシーラがふと近づいた。
正面から向き合ったかと思うと、主人公の左耳側という定位置に唇を寄せ、左耳に話しかけて来る。

これによって声の聞こえる方向が『正面』から『左』になる。

●左　0センチ
「【穏やかに優しく、丁寧に謝罪する。
『その件について全く考えが及ばず、申し訳なかった』という感じで。

しれっと嘘を言っている。
もちろん、実際はわざと何もせずに泳がせていた】
申し訳ございません。
お嬢様ったら、午後は休み時間毎（ごと）にお手洗いに行かれて。
ゆっくりお話しする間（ま）もございませんでしたから……すっかり失念しておりました。
【『なるほど、道理で違和感があった』と思っているかのようなふりをする。
もちろんその件はずっと覚えていたし、恥ずかしがり、困り果てる主人公を見て興奮していた。
だが、まだそれはおくびにも出さない】
何（なん）だかずっともじもじされていたのは、このせいだったのですね」
〈主人公〉
「シーラのっ……❤　シーラのせいでしょぉ……っ？」
シーラ、主人公の言葉を意に介さず、ひそひそとささやく。
シーラ、主人公の左耳にささやく。

★左　ささやき　０センチ　※マークのセリフまでささやく

「【穏やかに優しくたずねる。
いかにも『今気づいた』『もしかして……』という感じで。
『お一人でされていた』とは『オナニーをしていた』という意味】
もしかして、お手洗いに行かれた時も。
この状況に興奮なさり。
お一人でされていたとか……？」※

〈主人公〉
「してないいっ……❤
シーラのばかっ❤　ばかっ❤　ばかぁっ……❤
もぉひどいっ❤　ひどいいっ❤」

主人公、もう隠しもせずにシーラの身体に腕を回してしがみつくと、涙目でシーラを見上げる。
主人公は知っている。
『どうせシーラは、これが見たくてこうしているのだ』と。

『わたしがシーラの悪戯に耐えられなくなり、セックスをねだる姿が見たいだけなのだ』と。

だから主人公は『はいはい』『これがいいんでしょう』と、冷めた調子で応えてやればいい。

そうすれば、シーラは興が削がれてしまって、もうちょっかいをかけてこなくなるだろう。

だが、主人公にはそれができない。

何をされても毎回毎回、初めてみたいに、ばかみたいに興奮して。

本気でシーラを欲しがり、簡単に涙を浮かべてしまう。

それがますますシーラを悦ばせ、さらなる過激な行為に繋がっていくとわかっていても。

はぁはぁとわかりやすく欲情しながら、むしろ望むところだと、期待してしまうのだ。

シーラ、主人公の様子を受けて、正面に顔を向ける。

二人は正面から見つめ合う。

これによって声の聞こえる方向が『左』から『正面』になる。

●正面　15センチ

「【穏やかに優しく、少し申し訳なさそうに。
丁寧に謝罪する。
『少しやりすぎてしまったな』という感じで。
先ほどの謝罪よりも、主人公を気遣っている感じで。
主人公があまりにも、困り果ててしまっているので】
あら……。
ふふ。申し訳ございません。
少し意地悪し過ぎてしまったようです。
【穏やかに丁寧に謝罪する。
ひとつ前よりも、一段階真剣なトーンで】
御免なさい。
貴方様を困らせたいけないメイドのシーラを、どうかお許し下さいますか？」

〈主人公〉
「……っ。
ちゅーしてくれたら許すぅっ……❤」

主人公、すでに『下着を返してくれ』とは言わず、ただシーラの腰に身体を寄せる。

いつもこんな事をしているせいで、シーラの制服は、洗ってもアイロンをかけても、すぐしわだらけになる。
それだけシーラは日常的に主人公を受け止め、また、自由にしているのだ。

●正面　１５センチ
「【穏やかに優しく、少し申し訳なさそうに。
丁寧にお礼を言う。
主人公が本気で怒っていない事は、最初から承知している。
だが、それでも『少々やりすぎてしまったな』と反省しているので】
ありがとうございます」

ＳＥ５　主人公の足音
【最初から最後まで流す】
【ＳＥ６と同時に流す】
【ＳＥ６と同時にストップする】

ＳＥ６　シーラの足音
【最初から最後まで流す】

【ＳＥ５と同時に流す】
【ＳＥ５と同時にストップする】

ＳＥ７　シーラがベッドに腰かける音
【最初から最後まで流す】

シーラ、そう言うと、まずはベッドまで流れるように主人公を連れて行く。
それから、先に自分がその上に腰かけ……主人公を抱き寄せ、キスをした。

〈主人公〉
「ぁ……」

これはいかにも『ヤリ慣れた相手』とセックスを始める時の動作だ。
主人公はその事実を実感するとともに、シーラがあまりにも優しい目で見つめてくるのが恥ずかしくて、目を閉じてシーラを受け入れた。

●正面　０センチ
「【※１回※　キスする。

シーラからキスする、キスが始まる動作。
主人公の顔をこちらに向けさせてキスしている】
ん……❤
【※2回※　キスする。
軽く音を立てるだけの優しいキス】
ふ❤
ちゅ❤
【音を立てながら唇を離す】
ちゅぱぁっ……❤
【優しく、愛おしげに。
『主人公の事が可愛くてたまらない』という感じで。
また、主人公のおねだりがあまりにもささやかで可愛らしいので。
主人公の語彙に合わせて『キス』ではなく『ちゅー』と言う】
ふふ。
お嬢様は、本当にちゅーがお好きですね……❤」

〈主人公〉
「ぎゅーも❤　ぎゅーもして❤　してくれなきゃや❤

ずっと待ってたの、ずっと我慢してたのっ❤
してくれなきゃ許さないぃ❤」

主人公、シーラに涙声でじゃれ付きながら、次の行為をねだる。
さっきまであんなに恥ずかしい意地悪をされたのに、優しくされた途端安心してしまって。わがままモードになってしまったのだ。
そうだ。どうせ主人公の全ては、シーラにコントロールされている。
学校でセックスする事も、下着を穿かずに外を歩く事も。
隣に絶対シーラがいて、彼女が確実に安全を保障してくれるからできるのだ。
主人公は自立を望む女性、あるいは野外セックス癖の変態のふりをしながら、実際は、常にシーラに守られている。
彼女の加護のもと生きているからこそ、今日も自立ごっこと変態ごっこができるのだ。
主人公はそれが気恥ずかしく、嬉しく、幸せで。でも、時々もどかしい。
主人公はシーラを助けられる、対等な関係になりたいと願っている。
なのに実際は、シーラが多くを負担する事で、この関係が成り立っているからだ。

SE8　主人公がベッドに乗る音
【最初から最後まで流す】

〈主人公〉
「……ぁ」

そんな主人公を、シーラはまた受け止めて抱きしめる。
つい数時間前にしたばかりなのに、いや、数時間前にしたからこそ、二人はまた行為を始める。

主人公とシーラ、正面の、すぐキスできそうな距離で見つめ合う。

●正面　0センチ
「【優しく、愛おしげに。
『主人公の事が可愛くてたまらない』という感じで】
はい……この通り。
しっかりと抱き合って、謝罪のキスをさせて下さいませ。
【※3回※　キスする。
軽く音を立てるだけの優しいキス】
……ちゅ。

ちゅ❤　ちゅっ❤」

〈主人公〉
「シーラ、好きぃっ……❤　ちゅー……❤　もっとちゅーっ……❤」

●正面　0センチ
「【うっとりと。
『主人公の事が可愛くてたまらない』という感じで】
ふぅ……可愛い……❤
【『あら』と、ほんの少しだけ驚いている感じで。
主人公が自分から顔を近づけ、キスしてきたので】
あ……❤
【※6回※　キスする。
受け身に、一方的に攻められてキスする。
少し驚いている感じで】
んっ……❤　ん……っ。
んっ……❤
ふーっ、ふーっ。

ふー……❤

【※しばらく※　キスする。
自分からも積極的にディープキスする。
主人公を受け止めつつ、自分も濃厚なキスを返す感じで』
んんっく……ちゅ❤
ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅ❤
ちゅぱぁっ……ちゅ❤　んっく……ちゅぱっ❤
れろれろ……ちゅっ❤
ちゅっ❤　ちゅっ❤　ちゅっ❤」

こうして主人公が膝の上で抱きつき、押し倒さんばかりの勢いでキスをすると、シーラは手を後ろにつく事でこれを受け止め、ますます舌を深く絡ませてくる。
主人公は嬉しくて、無意識のうちにシーラの身体に股間を押し付け始めた。

SE9　主人公がシーラの身体に股間を擦り付ける音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【次の『シーラ』のセリフと重ねて流す】

【▲1　でフェードアウトする】

※ここからシーラはずっと『やや興奮気味』になる。
『これまでと比較して、すべて一段階ほど興奮しているな』という感じになる。
この後さらに『すごく興奮気味』と切り替わる。

●正面　0センチ
「【※6回※　少し早く呼吸する。
だんだんゆっくりになっていく。
満足げに、少し興奮した様子で。
主人公があからさまに、股間をシーラの身体に擦り付けてくるので】
はぁ、はぁ、はぁ。
はぁ。はぁ。はぁっ……❤
【※1回※　キスする。
軽く音を立てるだけの優しいキス】
ちゅ❤
【うっとりと。
ここから少し興奮気味になっていく。

『主人公の事が可愛くてたまらない』という感じで】
はぁ……可愛らしい……。
もう……こんなにお股を擦り付けられて……」

シーラ、主人公の左耳に話しかける。

これによって声の聞こえる方向が『正面』から『左』になる。

●左　0センチ
「【優しく、愛おしげに。
少しゆっくり目に、言い聞かせるような感じで。
言葉責めを始める。
先ほどまでの主人公の状態を言葉にし、心情を推察する事で、主人公を興奮させようとしている】
そうですよね。
下着を奪われ、ずっとスカートの下が裸で、心許（もと）なくて。
恥ずかしくて、不安で。
沢山興奮されてしまったのですものね。

【優しく謝罪しつつも、どこかセクシーに。
これからのえっちな展開を期待させる感じで。
先ほどの謝罪とは明確に違う感じで】
お待たせして御免なさい。
【恭しく誘う感じで。
普段の口調のまま、しかし自分をわざと卑下するような言い方で。
トラック０２とは、また違う方向のセックスをしようとしているので】
どうぞ。
どうぞいけないシーラの身体をお使い下さいまし。
シーラの身体で、たっぷりと濡れたおまんこを慰めて。
心ゆくまで気持ち良くなって下さいませ。
ね？」

〈主人公〉
「……シーラはっ？」

主人公、たまらなくなって、シーラを正面から見る。

……これじゃあまるで、わたしだけがセックスしたいみたいじゃないか。
でも、そんなはずない。
シーラだって、こうなる事を望んでいたから。
わたしが必死でおねだりするところが見たいから、下着を穿かせなかったはずだ……！
そう思ったら、このまま流されてはいられなくなってしまったのだ。
これによって声の聞こえる方向が『左』から『正面』になる。

●正面　0センチ
「【優しく続きを促す】
うん？」

〈主人公〉
「シーラは……？
わたしがぱんつ穿いてない事知ってて❤　どう思ってたののっ……？
シーラもっ❤　ほんとはシーラもっ❤
興奮してたんじゃないのっ……？」

主人公が今にも泣きそうな声で尋ねれば、シーラはますます嬉しそうだ。
見つめる目はどこかにやにやと勝ち誇った様子になり、平気でこのような事を打ち明けてくる。

●正面　０センチ
「【優しく。
『やっぱりお気づきでしたか』という感じで。
『四時間目』とはトラック０１前半の事。
『したくて』は『セックスしたくて』の略】
あら、ご存じでしたか。
えぇ。私（わたくし）も。
私（わたくし）もです。
四時間目からずっと。ずっとお嬢様としたくて。
したくて、我慢していたのです。
【※１回※　キスする。
軽く音を立てるだけの優しいキス】
……ちゅ❤」

シーラ、左耳にささやく。

これによって声の聞こえる方向が『正面』から『左』になる。

★左　ささやき　0センチ　※マークのセリフまでささやく

「【穏やかに優しく。
少しだけゆっくり目に。
本格的に言葉責めを始める。
また、自分もずっと主人公とセックスしたいと思っていた事を打ち明ける】
授業中、何度も、何度も。
お嬢様を犯す空想をして……。
お嬢様をからかいながら、その実（じつ）、お嬢様と同じように。
私（わたくし）もスカートの中を濡らしていたのです」※

〈主人公〉
「……！」

それでも、シーラの言葉に、主人公の心は一気にほどけ、とろけていく。
自分たちは同じ気持ちでいた。その事実がとても嬉しくて、安心してしまって。
先程の仕打ちなど、もはや前戯の一つでしかなくなって。
すべてをシーラにゆだね、従いたくなっていく。

★左　ささやき　0センチ　※マークのセリフまでささやく
「【穏やかに優しく。
少しだけゆっくり目に。
本格的に言葉責めを始める。
また、自分もずっと主人公とセックスしたいと思っていた事を打ち明ける】
空想の中で、お嬢様を泣かせて。
声が枯れるまで喘がせて。
お嬢様が『やめて』と仰られてもまるで手を緩めず。
欲望のままにいじめ抜く想像をして、とてもいやらしい目でお嬢様を見ていたのです。
【一呼吸おいてから。
ここから※マークまで、
恭しく誘う感じで。
普段の口調のまま、しかし自分をわざと卑下するような言い方で。

【トラック02とは、また違う方向のセックスをしようとしているので】
お嬢様。どうかこのシーラに、罰をお与え下さい。
大切な主を弄んだ罰として。
シーラを、お嬢様の性欲処理の道具として、使って頂きたいのです。
ね？
今夜はずっと。
お嬢様のしたいように致しましょう……？」※

〈主人公〉
「キスぅ……❤」

●左　0センチ
【優しく続きを促す】
ん……？」

〈主人公〉
「したいようにしていいって言ったでしょぉっ……❤
きしゅう❤　きしゅして❤　シーラとちゅーする❤

きしゅ❤　きしゅう……❤
きしゅしなきゃやだっ❤
許さないぃ❤」

主人公が喜びのあまり涙をこぼすと、こたびのセックスの力関係が決まった。
今度は、シーラが従者感強めに犯してくれるらしい。
おかしな日本語だとは思うが、二人はこのような行為が大好きだ。
最終的に、主人公が泣くほど気持ちよくされるのだけは決まっていて。
それまでの過程を、つど選びながら睦み合うのが、二人は好きなのだ。

●左　0センチ
「【優しく微笑んで。
主人公の要求があまりにもささやかで、かわいらしいので】
ふふ。承知致しました……❤」

シーラ、主人公の顔を引き寄せてキスする。

これによって、声の方向が『左』から『正面』になる。

●正面　０センチ
「【※４回※　キスする。
軽く音を立てるだけの優しいキス】
ちゅ❤　ちゅ❤
あんむ……ちゅ❤」

ＳＥ１０　シーラが主人公のお尻を撫でまわす音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【次の『シーラ』のセリフと重ねて流す】
【▲２　でフェードアウトする】

シーラ、主人公の頭の左側に自分の頭を置いて、お尻をまさぐり始める。

これによって、声の方向が『正面』から『左』になる。

●左　０センチ

「【うっとりと。
主人公のお尻があまりにもすべすべで、触っていて心地いいので。
また、ずっと下着をつけていなかった事で、少し冷えている事にも興奮するので】
あぁ……お尻、少し冷えてしまっている……❤
温めて差し上げます。
【※息づかいのみ※　で表現する。
うっとりとため息をつく】
はぁ……❤
【うっとりと感動した様子で。
少し独り言っぽくなる。
その位、シーラは主人公の身体に強い魅力を感じているので】
すべすべ……❤
本当に素晴らしい……❤
お嬢様の身体は、お尻も、御御足（おみあし）も。
お胸も、髪の毛も。全て素晴らしい……❤
【※４回※　ゆっくり、少し荒く呼吸する。
満足げに、少し興奮した様子で】
はぁ、はぁ。

はぁ、はぁっ……❤
【※息づかいのみ※　で表現する。
興奮を一度こらえる感じで】
……っ、
【少し興奮を抑えて。
優しく、丁寧に。
今回は『奉仕プレイ』なので、自分の感情を抑えようとしている】
お嬢様。
このままベッドの縁に腰掛け、スカートをたくし上げて。
両足を広げて下さいませ。
お嬢様のおまんこに……ご奉仕致します……❤」

〈主人公〉
「……❤」

主人公、いつもの恨めし気な目でシーラを見ながら、そのまま素直に従い、一度シーラから離れる。

SE11　主人公が動く音
【最初から最後まで流す】

それからベッドの縁に腰掛け直すと、下に何も穿いていないスカートをたくし上げ。両足を開いて。むわっといやらしい匂いが立ち込めてしまいそうなほど濡れそぼった股間を、シーラに見せた。

SE12　主人公がスカートをたくし上げ、足を開く音
【最初から最後まで流す】

SE13　シーラが近づく音
【最初から最後まで流す】

すると、シーラはすぐに顔を近づけ、主人公の性器を凝視し、その匂いを丹念に嗅ぎ始める。

これによって声の聞こえる方向が『左』から『正面の下』になる。

※ここから行為が終わるまで、シーラは主人公の股間のある位置で話している。

●正面　【※５０センチほど下※】０センチ

「【※２回※　ゆっくり、少し荒く呼吸する。

満足げに、少し興奮した様子で】

はぁっ……。

ふうっ……❤

【※８回※　とてもゆっくり、少し荒く呼吸する。

だんだん、さらに深く呼吸するようになる。

鼻で大きく吸って、口で吐く。

満足げに、少し興奮した様子で。

主人公の性器の匂いを、たっぷり嗅いでいるので】

すーっ❤　はーっ❤

すーっ❤　はーっ……❤

すーっ……❤　はーっ❤

すーっ❤　はーーっ……❤

【うっとりと感動した様子で。

主人公の性器の匂いについて感想を述べている。

『先程の方』とはホテルスタッフの事】
あぁ……❤　凄い匂い……❤
このような匂いをさせていては。
学友の皆様や、もしかすると先程の方にも。気づかれていたかもしれませんね」

〈主人公〉
「もぉっ……❤　全部シーラのせいじゃんっ……❤」

反論したところで、もはや無駄だ。
シーラはすでに主人公の股間に夢中で、そんなのは当然の事と言わんばかりに受け流す。
主人公がまたも一方的にイかされる瞬間が、近づいてきている。

●正面　【※50センチほど下※】0センチ
「【※1回※　キスする。
軽く音を立てるだけの優しいキス。
太ももにキスしている】
ちゅ❤
【※2回※　舐める。

ねっとり舐めあげる。
太ももを舐めている】
はぁんむ……。ちゅ❤
【うっとりと。
主人公の性器の濡れ具合と、それに伴う水音について感想を述べている。
夢中になっているので、主人公の指摘も意に介さない】
あぁ……もうこんな音が……。
【※４回※　舐める。
丁寧に音を立てて舐めあげる。
性器を舐めている】
んっ……んっく……❤　れぇろ……じゅるっ❤
【うっとりと。
主人公の性器の濡れ具合と、それに伴う水音について感想を述べている】
ここまでとは……❤
【※しばらく※　舐める。
丁寧に音を立てて舐めあげる。
性器を舐めている】
あぁんむ……じゅるっ❤　じゅるっ❤　ちゅるるっ❤

ぴちゃっ❤　ぴちゃっ❤　ぴちゃぁっ……❤
れろれろ、れろれろっ。
れろれろ。ぴちゃぁっ……❤
ちゅるるっ❤　ちゅる❤
【優しく、恭しい感じで。
『今回は、クンニでイかせる』という意味で言っている。
また、ここから※マークのセリフ終わりまで、舐めながら、主人公がどうすべきかを、丁寧に指示していく】
お嬢様……。
今度は、私（わたくし）の口と舌で、イかせて差し上げますね。
ですから……お嬢様は。
【※3回※　舐める。
下からぺろっと這わせる舐め。
太ももを舐めている】
ぺろっ……。
れろれろっ……えれえれ……❤
貴方様をこのようにした、悪い私（わたくし）の頭を。
【※1回※　キスする。

軽く音を立てるだけの優しいキス。
太ももにキスしている】
ちゅ。
手足で押さえつけ。
【※2回※　舐める。
わざと自分の唾を使って音を立てるような吸い方。
性器を舐めている。
また、わざと、主人公が絶対に拒否するだろう指示をしていく】
じゅるるっ……❤　ぴちゃぁっ❤
お好きなように揺さぶって。
私（わたくし）の身体に、正しい主従関係を覚え込ませて下さいませ」※

〈主人公〉
「えっ……？」

●正面　【※50センチほど下※】0センチ
「【※1回※　キスする。
軽く音を立てるだけの優しいキス。

太ももを舐めている。
また、引き続きわざと、主人公が絶対に拒否するだろう指示をしていく】
ちゅ。
この悪い私（わたくし）に。
【※1回※　舐める。
下からわかりやすく音を立てる舐め。
太ももを舐めている】
れぇろっ……。
立場を解（わか）らせて欲しいのです。
【※1回※　舐める。
丁寧に音を立てて舐めあげる。
性器を舐めている】
ちゅるるるるっ……❤
ね？」

〈主人公〉
「そんなのっ……❤　しないしっ……❤」

主人公の愛液をねちねちと味わいながら、シーラがおかしな事を言う。
自分を従者として、もっと乱雑に扱えと頼んでくる。

むろん主人公に『イエス』と言うつもりはない。
シーラも当然、それをわかっているはずだ。
だがその主張は、メイドとしては正しいものなのだろう。
主人公は今、実に半端な位置にいる。
『対等になりたい』と願いながら、そうとは言えない部分に対応しきれず。結局シーラに『譲ってもらう』関係から、脱却しきれずにいる。
また、シーラも『主人公と主人公の家に雇われ、養われている』現状から、主人公の希望に応じきれずにいるのだろう。
そんな関係はもどかしい。
だから、楽な方に振り切ってしまおうという意見そのものは間違っていないと、主人公は思う。

●正面　【※５０センチほど下※】０センチ
「【※しばらく※　舐める。
キスに近い音で、丁寧に音を立てて舐めあげる。

性器を舐めている】
んっく……ちゅ。ちゅっ❤
んっく……ちゅ。ちゅっ❤
くちゅっ❤　ちゅぱぁっ❤
ぺろぺろ、ぺろぺろ。ぺろぺろ、ぺろぺろっ❤
ん……❤
れろれろ……れろれろ……ちゅるっ❤」

〈主人公〉
「しないっ……❤　絶対しないっ❤　からぁ……❤」

だが、だからと言って『シーラの言う通りにします』『対等になる事を諦めます』などと言うはずがない。
こんな時にこんな格好で宣言したところで、さほど効力はない。
そうとわかっていても、言うべきだと主人公は思った。
主人公は現状を変えたい。どっちが上とか下とか言うのは、セックス中のごっこ遊びとしての力関係でだけでいい。
いや……たとえセックス中であっても、本来の自分の意思に沿わない事はしたくない。

そう思ったのだ。

●正面　【※５０センチほど下※】０センチ
「【※３回※　キスする。
軽く音を立てるだけの優しいキス。
太ももにキスしている】
ちゅ❤　ちゅ❤　ちゅ❤
【不思議そうに。
だが、意外ではなさそうに。
『主人公はそうはしないだろう』という事は、わかりきっている事だったので】
……なさらないのですか？
あくまで私（わたくし）と、対等を望む？」

〈主人公〉
「そうっ……❤　ずっと。ずっとそうっ……❤」

果たして主人公のこの言葉には、どの程度意味があったのだろう。
夕方で、大きな窓からオレンジの陽が入って。

シーラの顔が、ちょうど陰になっていてよく見えない。
シーラは感情を抑えるのがうまいから。主人公よりもずっと苦労していて、主人公よりも人間的に大人だから……。
今どう思っているのかも、はっきりとはわからない。

●正面　【※５０センチほど下※】０センチ
「【※１回※　キスする。
軽く音を立てるだけの優しいキス。
太ももにキスしている】
ちゅ。
【※１回※　舐める。
下からぺろっと這わせる舐め。
太ももを舐めている】
れろぉおっ……❤
【優しい声でありつつも、どこか切なげに。
主人公のこのような人柄が、シーラを複雑な気持ちにさせるので。
シーラは主人公の事を心から愛しているし、なれるものなら、主人公の希望通り、対等な恋人関係になりたい。また、これを実現させるために日々努力している主人公を尊敬し、

感謝し、応援している。
だが一方で『主人とメイドである自分たちが、本当に対等な関係になれるのだろうか』『いっそ、主人公が自分をもっと従者らしく扱ってくれれば、自分も割り切れるのに』と思ってしまう事もあるので】
本当に貴方様は……ご自分の立場をわかっておられない。
いけない方。
そのようですから……いつまでも私（わたくし）に好きにされてばかりなのですよ……❤」

〈主人公〉
「っ……❤」

SE14　シーラが近づく音2
【最初から最後まで流す】

言うと、シーラが自分の頭を、主人公の股間にまた密着させる。
そのまま、ほとんど話すのすら難しい状態で、話し始める。

●正面　【※５０センチほど下※】０センチ

「【優しく、恭しく。

ここからセリフ終わりまで、再び舐めながら、主人公がどうすべきかを、丁寧に指示していく】

ほら……股間を、もっと押し付けて下さいな。

【※口をふさがれているのに近い状態で※　話す。

主人公の股間に、顔を押し付けているので。

『そう。そうです。こうやって』と言っている。

厳密にセリフの通りにならなくてＯＫ】

ふぉう。ほうれす。こうひゃって、

上下にお尻を振って。

ベッドに後ろ手を付いて、反（そ）りあがって下さいませ。

【※口をふさがれているのに近い状態で※　話す。

主人公の股間に、顔を押し付けているので。

『こうして、気持ちいい所を、私（わたくし）に舐めさせるのです』と言っている。

厳密にセリフの通りにならなくてＯＫ】

ひょうしへ……きほひいい所を、わたくひに舐めさへゆのれふ。

【※８回※　舐める。

露骨に音を立てて、たっぷり舐める。
性器を舐めている】
じゅるるっ……。ちゅるっ❤
ぴちゃっ❤　ぴちゃっ❤　れろっ❤
じゅるるっ❤　じゅるっ❤　ちゅるるるっ❤
【※口をふさがれているのに近い状態で※　話す。
主人公の股間に、顔を押し付けているので。
『そうです、そう』と言っている。
厳密にセリフの通りにならなくてＯＫ】
ふぉうれふ……ほうっ……❤
【※１回※　舐める。
露骨に音を立てて、たっぷり舐める。
性器を舐めている】
れろぉぉっ……❤
【うっとりと興奮して。
主人公の性器の濡れ具合について述べている】
はぁ……可愛い……とろっとろに溢れてくる……❤
【※８回※　少し早く、少し荒く呼吸する。

鼻で吸って鼻で吐く。
興奮した様子で】
ふーっ❤　はーっ❤
ふーっ❤　はーっ……❤
ふーっ……❤　はぁーっ……❤
ふーっ。はーっ……❤
【※口をふさがれているのに近い状態で※　話す。
主人公の股間に、顔を押し付けているので。
『ほら。こうです。こうです。こう……❤』と言っている。
厳密にセリフの通りにならなくてＯＫ】
ほは。ほう。ほうれふ。
ほう……❤
【※しばらく※　舐める。
露骨に音を立てて、たっぷり舐める。
性器を舐めている】
あんむ……じゅるっ❤　ちゅぷっ❤　ちゅるっ❤
れろれろっ❤
じゅるじゅるじゅるじゅるっ、れろっ❤」

〈主人公〉
「シーラっ……❤　シーラぁ……っ❤」

こうして、主人公はまた絶頂に近づいて行く。
こんなにもあっさりと、今日二回目のイき顔を晒す。
三回目が来るのだってさほど遠くないだろうと思いながら、たっぷりと与えられた快楽に耽る。

●正面　【※５０センチほど下※】０センチ
「【※１回※　少し苦しそうに呼吸する。
鼻で息継ぎをしているような感じで】
んっふ……。
【※口をふさがれているのに近い状態で※　話す。
主人公の股間に、顔を押し付けているので。
『ええ……絶頂……して下さいませ』と言っている。
厳密にセリフの通りにならなくてＯＫ】
ええ……ぜっひょう……ひて下はいませ。

【※7回※　舐める。
少し苦しそうに。
たっぷりと熱心に舐める。
主人公の股間に、顔を押し付けている時間が長くなってきたので。
また、行為が激しくなってきたので】
んっく……ん……。んっ……ん……❤
んんっふ……ん❤　んーっ、
【少し苦しそうに。でも、嬉しそうに。
主人公が今回も、自分の手によってイきそうなので。
『わたくし』が『わたくひ』になる】
お昼休みのように、情けなく。
……わたくひに犯されて、イッて下さいまし。
【※7回※　舐める。
少し苦しそうに。
音を立てて、たっぷりと熱心に舐める。
主人公の股間に、顔を押し付けている時間が長くなってきたので。
また、行為が激しくなってきたので】
んんっふ……んっ。じゅるるっ❤

んっ……ん……❤　ぴちゃっ❤　れろっ❤
【※1回※　舐める。
苦しそうに。
主人公がイきそうなので】
んんんんっ……❤」

〈主人公〉
「あっ……❤　あぁぁぁっ❤」

●正面　【※50センチほど下※】0センチ
「【※4回※　苦しそうに呼吸する。
鼻で息継ぎをしているような感じで】
はーっ❤　はーっ❤　はーっ❤　はーっ❤
【※15回※　舐める。
苦しそうに。
音を立てて、派手な位に熱心に舐める。
ラストスパートという感じで】
れろれろっ❤　れろれろっ❤　ちゅるっ……じゅるるるっ❤

れーろ、れーろ。れーろ。れーろっ❤
じゅるるるっ……ちゅるっ❤
んーっく、んーっ……❤　じゅるるっ❤
【※1回※　舐める。
※ここで主人公が絶頂する※
苦しそうに。
主人公がイった事が、シーラのセリフからも伝わるような感じで、わかりやすく】
んんんうっ……！」

〈主人公〉
「ぁ。ぁっ……❤　ぁぁぁぁっ……❤」

こうして、主人公はまた絶頂した。
そしてそのまま……一気に脱力して、仰向けにベッドに倒れ込んだ。

SE15　主人公がベッドに倒れる音
【最初から最後まで流す】

●正面　【※５０センチほど下※】０センチ
「【※１２回※　荒く、早く、呼吸する。
鼻と口で息を吸って、早く呼吸を整えようとしている感じで。
だんだんゆっくりになる。
また、どこか満足げな呼吸】
はー。はー。はー。はー。
はーっ、はーっ。
はーっ、はーっ……❤
ふー。ふー。
ふー、ふー……❤
【※１回※　呼吸する。
荒い呼吸で、うっとりとため息をつく】
はぁ……
【うっとりと、嬉しそうに。
主人公がイッた事、どのようにイッたかについて、改めて言葉にする事で、主人公を興奮させようとしている】
可愛らしい。
お嬢様のクリトリスさんは。

今度は私（わたくし）の舌で……イけましたね……❤」

SE16　シーラが近づく音3
【最初から最後まで流す】

〈主人公〉
「っ……❤」

主人公、息も絶え絶えのまま、ぐったりとシーラの意地悪を聞く。
『舌でねちねちとクリトリスを舐められたのだから、クリトリスでイくのは当たり前だろう』と言ってやりたくなるが、快感の余韻を受け止めるのが精いっぱいで、口を開くのもおっくうだ。
そんな主人公に、シーラがすぐまた近づく。
ヤリ慣れているメイドは、終わった後のケアも完璧なのだ。
主人公はこれから、ただ寝転がってシーラに甘えているだけで、身綺麗にしてもらい、安心して眠りにつく事ができる。

シーラ、移動する。

主人公の正面下、ベッドの下から、主人公に覆いかぶさってキスをする。
これによって声の聞こえる方向が『正面の下』から『正面』になる。
※ここで行為が終わる。シーラの興奮状態が終わる。

●正面　0センチ
「【※1回※　キスする。
軽く音を立てるだけの優しいキス】
ちゅ❤」

主人公、甘くキスをされて、力なく目を閉じる。
シーラはそのまま、左耳に話しかけてくる。
これによって声の聞こえる方向が『正面』から『左』になる。

●左　0センチ
「【穏やかに優しく。

疲れ切った主人公をあやすように】
お疲れでしょう……少し休みましょうか……❤」

〈主人公〉
「あ……❤」

主人公、シーラの優しい声音にびくっと身を震わせ、そのままおとなしくシーラに抱きしめられる。

シーラにぎゅっとされて、なでなで、よしよしってしてもらいながら寝たい。

それ以外の事が考えられなくなっていく。

SE17　シーラが主人公を抱きしめる音
【最初から最後まで流す】

●左　0センチ
「【とても優しく。

疲れた主人公をそっと寝かしつけたいので】
私（わたくし）がこうして、抱いていて差し上げますから。
【※1回※　キスする。
軽く音を立てるだけの優しいキス。
耳にキスしている】
ちゅ❤」

主人公、素直に頷くと、再びシーラにキスをされる。

これによって声の聞こえる方向が『左』から『正面』になる。

●正面　0センチ
「【※3回※　キスする。
軽く音を立てるだけの優しいキス】
ちゅ。ちゅ。ちゅ❤
【※3回※　呼吸する。
少し荒いだけの、通常の呼吸に近い呼吸】
はぁ。はぁ。はぁ……❤

【ふと思いついたように、嬉しそうに。
この思いつきで、シーラはますます主人公を喜ばせられると確信したので】
あぁ……そうだ……❤」

〈主人公〉
「んんっ……⁉」

だが、ここで予想外の事が起きた。
後はもう主人公を寝かしつけるだけに見えたシーラが、突如舌を入れてキスをしてきたのだ。

●正面　0センチ
「【※1回※　キスする。
軽く音を立てるだけの優しいキス】
ちゅ……❤
【※4回※　キスする。
舌を入れて、軽めのディープキス。
唇を重ねるだけのキスからディープキスに変わる事で、自分の口内に残った主人公の愛

液を、主人公に口移ししている】
んんっふ……れろぉっ……❤
ちゅ❤　れーろっ……❤」

〈主人公〉
「んっ❤　んっ❤　んんんぅ……っ❤」

主人公の口内に、とっくに知っていて、とっくに何度も舐めている、自分自身の愛液の味が広がる。
この、なんとも言えない味。
だが、シーラはいつも喜んで舐め、飲んでいるものの味。
それはシーラとの行為に興奮して、欲情して。気持ちよくさせられた証拠の味だ。
だから、主人公は思う。

シーラって本当に、これをさせるのが好きなんだから……。
わたしの味を、自分の口を介して舐めさせるのが好きとか、ほんとに変態すぎる……。
と。

●正面　0センチ
「【うっとりと嬉しそうに。
主人公の愛液について述べている。
ここだけ『ご主人様』と呼ぶ】
ほら……❤　これが今日のご主人様のお味です。
【※6回※　キスする。
ねっとりしたディープキス。
舌を使って、主人公の愛液をさらに口移ししている】
れんろ……んっ……ちゅ。
ちゅ。ちゅる……。
れーろっ……❤」

〈主人公〉
「んんんうっ……❤」

●正面　0センチ
「【ねっとりと、少しセクシーに。

自分の口の中に残っていた主人公の愛液を、主人公自身に飲ませた事で、征服感に満ちているので】

たっぷり。

堪能して下さいましね……❤

【※1回※　キスする。

軽く音を立てるだけの優しいキス】

ちゅ❤」

こんな事をされているのに嬉しいなんて、自分はつくづくマゾヒストだ。

つくづくシーラにヤられるのが好きすぎる、芯からの負けセックス好きだ。

そんな事を思いながら……主人公の意識は、急速に眠りへ近づいて行く。

ここでフェードアウトとして終了。